

男女共同参画推進せんだいフォーラム 2023

先達に聞く 2023

長く活動してきた女性たちが語る、「次世代に伝えたい思い」

2023年11月17日(金)
エル・パーク仙台 市民活動スペース

「先達に聞く」は、仙台で長年活動してきた女性たちに「次世代に伝えたい思い」をお話しいただくものです。

エル・パーク仙台は「市民活動をする場がほしい」という女性たちの声を受けて、全国に先駆けて開館した男女共同参画センターです。「先達に聞く」は2016年に「エル・パーク仙台30周年企画」として初めて実施し、今回で7回目になります。

それぞれの団体の活動については、催し物や様々な媒体を通して知ることができますが、一人ひとりの女性たちがどのような思いで、何をめざして活動を続けてこられたのか、その思いに触れる機会は多くはありません。男性主導の社会が、女性たちの声に耳を傾けてこなかったという現実もあります。

財団では、女性たちの経験や思いを継承するために、次世代へのメッセージを伝えていただく場をつくりました。今回を含め35名もの先達にお話しいただきました。平和、子育て、環境、労働、まちづくり——。あらゆる分野での女性たちの草の根の活動が、今の仙台につながっていることを実感しています。

この記録を通して、一人ひとりの思いを受け取っていただければ幸いです。

※記録は、ご本人の発言をもとにまとめたものです。

※仙台市男女共同参画推進センターのホームページで、この冊子のPDFファイルをダウンロードできます。

URL <https://www.sendai-l.jp/>

目次

「子どもたちに平和な世界と紙芝居を」 伊藤 俊子 紙芝居文化の会みやぎ 代表／紙芝居文化の会 運営委員	P.1
「詩作することで深まった人生」 渡辺 仁子 風花の会 代表	P.2
「次世代に引き継ぐため3つのことを実行」 渡辺 節子 森のおもちゃ図書館 代表	P.3
「平和を壊されてなるものか」 鹿戸 佳子 宮城女性九条の会 世話人	P.4
受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ	P.5

「子どもたちに平和な世界と紙芝居を」

伊藤 俊子 (いとう・としこ) さん

紙芝居文化の会みやぎ 代表／紙芝居文化の会 運営委員

1965年～2002年 宮城県職員 宮城県中央児童館指導課で子どもの健全育成に携る。
特に子どもの文化活動育成に努力する。

2000年 「紙芝居大学inみやぎ」を開催 紙芝居の魅力にはまる。

2001年 全国組織「紙芝居文化の会」発足

2002年 「紙芝居文化の会」運営委員

2004年 「紙芝居文化の会みやぎ」発足 (代表 川端英子) 事務局長として活動
県内各地に会員が増え、さまざまな紙芝居活動を展開している。

2023年 「紙芝居文化の会みやぎ」代表



紙芝居の歴史

紙芝居は 1930 年ごろ生まれた日本独自の文化という事をご存知でしょうか？当時、世界大恐慌で失業者が溢れ出ました。生活の糧として手描きの紙芝居を版元から借りて自転車に舞台を積み、街角などで子どもたちを対象に、飴やお煎餅を売って日銭稼ぎをしていた街頭紙芝居が始まりでした。また紙芝居は共感が広がる文化財であることを知っていた国は、先の戦争で国策として多くの紙芝居をつくり戦争を正当化しました。戦意高揚のため全国各地で演じられていたようで、紙芝居の負の歴史でもありました。

90 年余りを経て今、日本生まれの紙芝居は、非常に素晴らしい共感の文化として世界に広まっています。

宮城に紙芝居を広めたい

私は県中央児童館で長年「子どもの健全育成」という仕事に関わりました。特に「児童文化普及」という活動は、様々な子どもの文化の専門家を講師に迎えたり、子どもたちと人形劇づくりをしたり、楽しい仕事でした。私が本格的に紙芝居に向き合ったのは、県中央児童館で開かれた「紙芝居大学 in みやぎ」という講座でした。実行委員長は川端英子さん。川端さんから仙台でぜひ開催したいという事を聞いて真っ先に手を挙げました。私はそこで、小さな舞台から醸し出される紙芝居の世界の面白さと奥深さに魅了されました。

その翌年に「紙芝居文化の会」という全国組織が誕生しました。世界に紙芝居を広めるためには、それまであまり研究されていなかった紙芝居についての理論を構築し、演じ方を深めることをめざすという組織でした。お誘いを受けて私は「紙芝居文化の会」の運営委員になり、紙芝居についての学びや交流を深めていくようになりました。その後、上京しなくとも地元での学びや交流を深めたいという願いで川端さんと相談し「紙芝居文化の会みやぎ」を立ち上げ、来年 20 周年を迎えます。

紙芝居を楽しむために

保育園などに紙芝居舞台をもって訪れると「紙芝居だ！紙芝居だ！」と言って寄って来る子どもたち。心から紙芝居を楽しんでいる子どもたちの姿に、喜びをたくさんもらいました。また紙芝居の交流のために海外を何か国が訪れた時、海外の方が日本生まれの紙芝居を楽しみながら演じている姿は刺激的でした。

作品の持つ力やメッセージをしっかりと伝えるための演じ方など、紙芝居の奥は深く、まだまだ学び合わなければなりません。

子どもたちに平和な世界を

みなさんには、エル・パーク仙台で行う男女共同参画推進せんだいフォーラムでの紙芝居実演や、私たちが主催する講演会に参加いただき、お仲間にもなっていただけたらと願っています。

現在、80 名近くの県内会員との交流を深めながら、子どもたちに素晴らしい紙芝居の世界を手渡すことを目標に活動しています。平和でなければ紙芝居も楽しめませんので、平和な世界も手渡していけるよう努力したいと思っています。

市内の図書館で「紙芝居おはなし会」を定期的で開催しておりますのでのぞいてみてください。また 12 月 7 日は、「世界 KAMISHIBAI の日」。世界各地で紙芝居が演じられることでしょう。



スピーチの後、紙芝居『おおきく おおきく おおきくなあれ』を演じた伊藤さん。

「詩作することで深まった人生」

渡辺 仁子さん (わたなべ・じんこ) さん

風花の会 代表



詩を書き始めたのは子育ての時期。1977年～1989年まで高田敏子主宰「野火」会員。暮らしの中から詩を発見することを学ぶ。1981年地元の勉強会として「仙山野火」創刊。9号まで出した後、エル・パーク仙台に会場を移し、毎月例会を重ね詩誌「風花」を発行。32号になる。詩を書き続けながら情報誌のライターとして「仙台リビング」「りらく」などでも活動してきた。自分の想いを自由詩で表現し、それをまとめた詩集に『空の窓』『森の地下鉄駅』『ことばの翼』『虹のブーツ』がある。

詩との出会い

詩は一人でも書けるものです。でも、私はずっと仲間たちと詩を書いてきました。定期的に詩を書くようになったのは、仕事をやめて家庭に入り、子育てが始まった頃のことです。自己表現の場が欲しいと願ったのです。日々成長する二人の子を育てながら、ぼつりぼつりと詩を書き始めました。

当時、母親向けの雑誌の中に「お母さんペンクラブ」という投稿欄があり、ある時、生後間もない娘に書いた「幼子に」という詩と、二歳の息子に向けた「空を回る」という詩が掲載されました。その時選者の方からいただいた“よい作品とは、たとえ小さな世界でも宇宙的なスケールを持たずには終わらないものです”という言葉が、以後私の詩作の指針となりました。

「野火」から「風花」へ

詩を書き始めた頃「月曜日の詩集」で名高い高田敏子さんが「野火」という詩誌を発行していることを知り、ここなら私も書けるかもしれないと思い切って飛び込みました。それから二ヶ月に一度届く「野火」を待ちわびるように。有名な詩人のバックアップもあり、色々なことを学びながら14年間を過ごしました。

やがて、仙台の会員たちで、地元の勉強会を開こうということになり、「仙山野火」を創刊し、9号まで発刊しました。その後、例会は「風花」の会となり、エル・パーク仙台で毎月勉強会を開くようになりました。年一度、その成果を詩誌「風花」として発行しています。32号まで、通算40年以上出していることになります。毎月の締切りがあり、仲間がいて集まれる場所があることが長続きの要因だと思っています。

例会に作品を一編持ち寄ってコピーし、合評します。当番はいても特別な先生はいません。それぞれ率直な感想を述べ合うことで、独りよがりではなく、より多くの人に伝わる詩を目指しています。

詩作を豊かにしてくれたもの

子育ての時期を経て、詩作が仕事にもつながりました。「仙台リビング新聞」とさらに月刊情報誌「りらく」という地域情報誌に、それぞれ創刊号から関わりました。インタビューの仕事で多くの方々の素晴らしい生き方を知り、それを伝えることができました。

大きな出会いはさとう宗幸さん。TV局の“あなたの詩にメロディーを”というコーナーの第一回に選ばれ、作曲家がどんな方かも知らぬままスタジオへ行きました。ヨチヨチ歩きの娘に書いた「あるく」をギター片手に歌ってくれたのが若き日の宗幸さんでした。

その後小さな手作り詩集『空を回る』をつくった際には、「あるく」の楽譜も添えました。これまで何冊か詩集を出しましたが、その時その時の作品を形として残すことができたのはうれしいことです。

詩をもっと身近なものに

第三詩集の『ことばの翼』を出した後に、文学館で男性から声をかけられました。詩を書く方で、気軽に街の中で音楽と文学を楽しむ場をとという構想を持っていて、さらに文芸誌を出していた方も加わり3人で“朗読サロン・虹の街”をスタートさせました。会場はレストランや喫茶店、市の公共施設など。3度目の開催を前に東日本大震災に襲われましたが、プログラムを急遽組み直し、震災にちなんだ詩を書くなどして、様々な形で実施。それが大きな反響を呼びました。その時の収益は被災した子供たちのための支援に回すこともできました。この一連の活動は、あまり類のない芸術的市民活動ではなかったかと思っております。

コロナ禍の2年前に『虹のブーツ』という詩集を出しました。宗幸さんに帯文をお願いしたところ、“仁子さんの真骨頂か”で始まる言葉をいただきました。私の詩を見守ってくださった方々に感謝しております。

「次世代に引き継ぐため 3 つのことを実行」

渡辺 節子 (わたなべ・せつこ) さん

森のおもちゃ図書館 代表

- 1983 年 夫の転勤に伴い仙台市へ転居。
障害者の衣服作りの工房「繕」で活動中に、知人の紹介で布のおもちゃ作りに参加する。
- 1988 年 活動の場を旭ヶ丘市民センターに移し、「森のおもちゃ図書館」を発足。
以来月 3 回、ボランティア団体としてセンターに図書館を開館。児童館、市民センター、地域の活動への貸し出しを主としている。
- 2022 年 代表となる。



おもちゃを女性たちの手で

2022 年 5 月、前代表が突然余命を告げられ、8 月中旬にはさよならをしてしまいました。メンバー全員が動揺しました。ですが、会は続いておりました。月 3 回、青葉区の旭ヶ丘市民センターで活動しています。「森のおもちゃ図書館」は台原森林公園の入口にあることに由来しています。親子が公園で遊んだ後にお弁当持参で、憩いの場である「屋根のある公園」のおもちゃ図書館に遊びに来られていました。

図書館の運営は、主婦を中心とした市内のボランティアの女性たち。子どもが好き、本が好き、そして手芸が好き。何よりも作る事が大好きな人たちの集まりです。

市民センターの一室で、子どもたちが楽しく元気に遊ぶ声を聞きながら、メンバーは部屋の片隅で針を動かし、作品作りを楽しみます。佐藤忠良さんの「おおきななかぶ」や、仙台出身のとよたかずひこさんの「でんしゃにのって」というかわいい絵本もタペストリーにしました。県立こども病院に入院中の子どもたちを見舞い、たくさんのおもちゃを寄付したこともあります。

おもちゃは子どもの心身の発達にとって、とても大事なものだと思うんですね。それが布でできていて、ぬくもりがあって、汚れたら洗える。壊れたら修理ができる。そういうものを私たちは目標にしてたくさん作ってきました。今でも 200 点以上の作品があります。

当初の目的を見失って

しかし、活動を始めて 30 数年、世の中はとても変わりました。子育て支援も整い、母親たちが職場に復帰できる状況になり、おもちゃもプラスチックの物が増えました。親子で大勢で遊ぶことも減り、個々の時代が変わったように思います。

気がついたら、「一番に子どものことを考える」という当初の目的が見えなくなってしまい、毎回、裁縫道具を持って旭ヶ丘市民センターに出かけて、自分たちの

楽しいものを作って一日を過ごす……というような、大人目線の手づくりサークルのような状態。惰性というか、本来の目的から離れていたのではないかと私は思いました。長い年月の活動の中で人の入れ替わりもあり、一時はスタッフが 5 人程度になってしまった時期もありました。

意見を出しあえる会に

これではいけない、当初の目的に戻らなければと思いました。たとえばコロナ禍で、布のおもちゃはとても敬遠されました。消毒をしなきゃだめだ、小さなお子さんは口に入れちゃう。そこがネックになってしまったので、どうしたら子どもたちに遊んでもらえるか、みんな話合いを始めたのですが、人の顔色を見て意見を言うことを控えたり、かと思えば長年の慣習から「こうでなきゃだめだ」と言ったりして、みんなの意見がなかなか反映されませんでした。

代表になった私ができることは何か、新しい世代の人たちにどのようにつなぐか、いろんな方のご提案をお聞きしたいと思いました。そのためにまずは 3 点を実行するようにしています。月 1 回の企画会議を開くこと。メンバーには、「意見を求められたら人の顔をうかがうのではなく、自分の意見をきっちりお話し」してもらうこと。意見は少し違っても、メンバーの総意で決まったことはできるだけ実行すること。この 3 点です。そしてしっかりした形で次世代に引き継いでいきたいと思っております。

多くの子どもたちに使ってほしい

たくさんのおもちゃがあります。旭ヶ丘市民センター 4 階の小ホールに「森のおもちゃ図書館」の看板が出ています。第 1、2、4 水曜日の午前 10 時から午後 3 時まで開館しております。児童館や市民センターに貸し出しもおこなっています。ぜひ一度、お越しになって手にとってご覧ください。お待ちしております。

「平和を壊されてなるものか」

鹿戸 佳子（しかと・よしこ）さん

宮城女性九条の会 世話人



戦後、日本国憲法・教育基本法が制定されて新しい教育への希望に湧きたつ教師たちの情熱と愛につつまれて育つ。

1966年「日本国憲法を守ります」と宣誓し、小学校の教員となる。先輩教師の『再び教え子を戦場に送らない』の決意に感動。退職後、設立間もない宮城女性九条の会に入会。現在は世話人、事務局員の一人として九条の価値を尊び賛同者をふやす活動に当たる。若い人たちにどうつないでいくのが課題。

九条の会のはじまり

2004年、アメリカが始めたイラク戦争に自衛隊が派兵されかねない事態が起きたことに対して、これは憲法九条違反であると、加藤周一さんたち9人の知識人が「九条の会アピール」を発表して国民に訴えました。戦争の危機を肌で感じたYWCAの戸枝慶さんはじめ一戸葉子さん、樋口辰子さんたちが呼びかけ人となり、翌年800人近い県内の女性たちで「宮城女性九条の会」を立ち上げました。

日本は先の大戦でアジアで2,000万人、日本国民310万人の命を失わせたと言われます。この甚大な加害被害の反省から「二度と戦争はしない、軍隊は持たない」との教訓を導き出して世界に宣言しました。新憲法は「国民主権」「基本的人権の尊重」、憲法九条に基づく「平和主義」を掲げて戦後の復興をスタートさせました。

「戦争できる国づくり」への危機感

2012年に政権に返り咲いた安倍元首相は、「改憲」を表立って発信するようになりました。「戦争できる国づくり」に着手し、2014年には集団的自衛権の行使容認を閣議だけで決めてしまいました。国会や国民に説明のないまま、外国での戦争に自衛隊が参加できるように国の形を変えてしまったのです。

実施のための法律＝安保法制が採決される日、国会前には12万人もの国民が詰めかけて抗議の声を挙げました。宮城県からもバス2台でかけつけましたが、2015年9月19日午前2時、憲法違反の法案は数の力で成立してしまいました。

安保法制は成立しましたが、憲法九条はまだ生き残っています。自民党が九条をなくしたいのは、自衛隊を国防軍に格上げし、アメリカが戦争を始めた場合に海外で一緒に戦わせたいと考えているからでしょう。これまで自衛隊は九条の範囲内で海外で道路を改修したり井戸を掘ったりなどの平和貢献をしてきましたが、

それだけでは国際社会のつき合い上、名誉ある地位は占められないというのです。安倍元首相や岸田首相が言っている「積極的平和主義」とは国民の命の犠牲の上に築かれるという考え方なのだと思います。

自衛隊が国防軍になると

国防軍を持つと日本の社会はどう変わるのでしょ。軍隊は政府に反対する国民を力でしる役目を負っています。戦争は軍隊がやることだから自分には関係ないと言う若者がいますが、そういうわけにはいきません。2012年に発表された自民党の改憲草案には「日本国民は、国と郷土を誇りと気概を持って自ら守り」と書かれています。戦争は国民の協力なしにはできないからです。まず、たくさんの兵士が求められます。物資も食料も必要です。税金が上げられます。軍事以外の予算が削られます。兵士が足りなくなります。平和的生存権は認められなくなり、戦争反対も言えなくなります。

Z世代3,000人に「日本が戦争に巻き込まれたらどうするか」と聞いたところ、「参加しないが反対の声をあげる」が36%、「参加しないで外国に逃げる」が21%だったそうです。ある学者は「その事態になれば参加しないとか逃げるとかいう選択はできるわけがない」とコメントしています。積極的平和主義とは国民の自由を奪う決断と言えます。

憲法を守り、活かす

今の若者は危機感がないように見え、九条を知らないように見え、選挙にも行かないように見えます。国民として憲法を学び、付与されている権利を知り、主権者としての自覚を持つことは当たり前のはずですが、その機会を与えられてこなかったのでしょう。

一方、国を動かす重要な立場にいる政治家たちが憲法を守らず、法律を守らず、国民に対して責任を取ろうとしないことは驚くべきことです。

政治の刷新と公教育の中で主権者教育をしっかりとやるのが大切だと思います。

受けとめ、つなぐ思い ～話し手へのメッセージ

【伊藤 俊子さんへ】

- ・ご自身の人生を切り拓く姿勢に感銘を受けました。
- ・とてもバイタリティのある伊藤さんのような、いきいきとした人生を生きたいと思いました。
- ・お話しされる表情も声も大変優しく、紙芝居にとっても癒されました。若き日の伊藤さんの学びが、きっと今に生きているんだと感じました。
- ・紙芝居おもしろい！これからも残したい文化ですね。
- ・紙芝居が始まった途端に、会場が一気にあたたかくなりました。スピーチも力強さを感じました。

【渡辺 仁子さんへ】

- ・詩を通じて交わり、広がり、深まる人生の出来事を、楽しく聞かせていただきました。生きること、生活することのひとつひとつが、とても愛おしいですね。
- ・「自分を表現できる場」を持っているのは素敵なことだと感じました。ぜひ詩集を読んでみたいです。
- ・「40年も続けてこられたのは仲間がいたから」という言葉が印象深かったです。仲間が集まれるようにと仁子さんがそこに居続けていらっしゃる姿が目につかびます。
- ・宗さんとのエピソードにほっこりしました。言葉を紡ぐことの大変さ、大切さを知った気がします。

【渡辺 節子さんへ】

- ・節子さんのお話を聞いて、リーダーシップの有り様、お手本をうかがった気がしました。自分の意見をきちんと言う大人になります。
- ・手作りのおもちゃは何ものにも代えられない貴重なものですね。“みんなで決める”ことは難しいけれど、民主主義の基礎です。それを実行しようとグループをまとめていらっしゃる姿に敬意を表したいです。
- ・リーダーとしての芯の強さと柔軟さを感じました。歩みを止めない渡辺さん、素敵です！

【鹿戸 佳子さんへ】

- ・平和は憲法によって守られていると子どもの頃から教わってきました。大人になった今、問題意識を持つことの大切さを改めて考えました。
- ・若い世代や子どもたちに、平和な日本をプレゼントしたい、そのために正しく知識を得たいと思いました。
- ・「自分たちが生きたい社会は自分たちの声でつくる」というメッセージから、大切なことを学びました。
- ・戦争というものについて知らなかったことがたくさんあり、勉強になりました。戦争がない世の中にできるよう、次世代が安心して暮らしていけるよう発信していきたいです。



男女共同参画推進せんだいフォーラム 2023
「先達に聞く 2023」

2024年3月発行
公益財団法人せんだい男女共同参画財団

仙台市男女共同参画推進センター
エル・パーク仙台
〒980-8555
仙台市青葉区一番町 4-11-1
141ビル（仙台三越定禅寺通り館）5・6階
TEL. 022-268-8301
FAX. 022-268-8316